

**白井晃 (芸術監督)**

私が KAAT 神奈川芸術劇場の芸術監督になって来年度で 4 年目になります。KAAT は都心からは近いようで、でも少し離れているという微妙な距離にある劇場ですので、特色あるオリジナリティ豊かな劇場にしたい、という思いでこれまで取り組んで参りました。演劇、ダンス、身体表現、音楽、アートなど様々なジャンルにおいて、徐々に特色を出せてきているかな、という自負はあります。最近、公共劇場の役割とは何かを特に考えるようになりまして、より多くの作品を創造し、同時により多くの人に舞台芸術に出会える場を作りたいと考え、今回のラインアップを決定いたしました。ネット社会が進む昨今、なかなか劇場という場所に足を運ばなくなっている傾向にはありますが、公共劇場として表現の幅をさらに広げ、いかに力強く、いかに多くの人に舞台芸術の魅力を打ち出せるかを考えてのラインアップになったのではとっております。2019 年度の KAAT にもぜひご期待ください。

**小金沢健人 (小金沢健人展『Naked Theatre -裸の劇場-』)**

普段は現代美術という領域で活動しておりまして、KAAT で行われているような演劇や舞台作品に関してはまったくの門外漢です。KAAT は懐が深いというか、こんな門外漢の私にも 門戸を開いてくれたのですが、キュレーターからは劇場を使って劇場ならではの 展覧会を 作ってほしいと言われました。展覧会の会場としてあらためて劇場を見てみると、入り口 には扉が二つもあるし、天井にはいろいろなものが吊ってあったり、部屋が真っ暗で空調 が完全にコントロールされていて、外の世界から完全に遮断されるようになっている。内臓のように器官がむき出しになっていて、それらを動かすスタッフもふくめて劇場なんです。演劇公演に慣れていないと、これは一体どういう空間だと思うわけで、素人からすると 劇場そのものが面白い。ここから、舞台も演劇も芝居も取っ払って、劇場を演出すること。劇場を裸にしたところからどれだけ面白い時間と体験を演出できるか、頑張りたいと思います。

**三浦基 (「シベリアへ！シベリアへ！シベリアへ！」：上演台本・演出) ※ビデオメッセージより**

KAAT との共同製作も 9 回目になりますが、今回の新作はチーホフの「シベリアの旅」という紀行文をヒントにした作品です。チーホフの「三人姉妹」が理想郷をモスクワに求めた、「モスクワへ！モスクワへ！モスクワへ！」という台詞を借りてタイトルをつけました。理想郷はモスクワなのか、シベリアなのか……ということを考えながら、チーホフの短編をコラージュして、未開の地を抜ける長旅を明るくコント風に描こうと思っています。

**多田淳之介 (「ゴドーを待ちながら」：演出)**

僕は小学校 4 年生まで川崎に住んでいた元神奈川県民で、今回オファーを頂けたのはとても嬉しく光栄です。ベケット作品の面白いところは、演劇を相対化して書いているところで、演劇の取り扱い方にはシンパシーを感じます。本作『ゴドーを待ちながら』でも、観客は、誰かを待っている人をずっと見ているだけという、劇場で実際に起きてることを書いてあり、そこを楽しみたいです。今回は随分待ったなあというバージョンと、これから相当待つんだろうな、と世代を分けた 2 バージョンを作る予定です。難解と思われた作品を、親近感のある言葉で戯曲本来の喜劇性を高めている今回の新訳に“加担”して、待つことのポジティブさや面白さを見つめなおすことと、最近我々は携帯を持つようになって待たなくなってしまうので、改めて身体を使って待つことを色々な角度から見られたらいいな、と思います。

### 松井周（「ビビを見た！」：上演台本・演出）

白井さんとは以前から「埋もれている名作を掘り起こしたいよね」と話していて、様々な作品を検討していました。この作品は、大海赫さんという作家の絵本でまさに知る人ぞ知る名作です。僕が子供の頃に、大海さんの「メキメキえんぴつ」という作品を読んで、トラウマになるくらい怖かったのを覚えているのですが、この『ビビを見た！』も、恐らく子供の頃読んだらトラウマになるであろう、終末世界のお話です。目が見えない男の子が、7時間だけ目が見えるようになり、引き換えに他の人全員のが目が見えなくなりパニックが起こっていく…というストーリーで、とかく物事を把握できないままで1つの方向に流れていってしまいがちな今の風潮にも似ている様子を何とか舞台上に仕立て上げられたらと思い、この作品を選びました。テクノロジーが発達した現代でも、演劇界は身体というかなりアナログなツールで表現してきたと思いますので、この作品も出来るだけアナログな作りで、このお話のパニック状況を体感していただけるよう創っていきたいと思っています。

### 山本卓卓（上演台本・演出 キッズプログラム『二分間の冒険』）

『二分間の冒険』は、ファンタジーの王道であり、その物語の中に、恋愛、友情、老い、といった誰もが悩み共感する要素が詰まっているので、面白くなりそうだと楽しみにしています。この舞台では、キャストの何名かは本当の小学生が出演します。常日頃から僕が心がけている、演劇の多様性と可能性を試すために、幅広い年代の子供たちに集まってもらいオーディションしました。オーディションで僕の指示に眉をひそめた子たちを、面白そうだなと思って選んでいます(笑)。

今回、出来る限りデジタルに、映像を駆使して創っていきたいんですが、経験上、演劇をデジタルにするとアナログになることが多く、そのあたりも注目してもらえればと思っています。

### 森雪之丞（「怪人と探偵」：脚本・作詞・楽曲プロデュース）

いくつかのミュージカルの訳詞を手がけるなかで、ミュージカルブームの昨今、日本人アーティストたちのスキルは上がっているのに、いまだに海外からの輸入モノが主流であることに違和感があり、日本オリジナルのミュージカルがもっとあるべきなのではないかと、ずっと考えていました。そんなとき、劇団☆新感線のいのうえひでのりさんとの出会いがあり、『サイケデリックペイン』や『ソング・ライターズ』を作りました。本作は、その構想をずっと温めていた大切な作品で、初稿を上げてから4年以上が経っています。中川晃教さん、加藤和樹さん、大原櫻子さんらの強力なキャストを得ることができ、色々なアイデアが出てきます。また、東京スカパラダイスオーケストラさんがテーマ曲を作ってくださいまして、スタイリッシュでありながらやや昭和的なニュアンスのある曲ができています。これに、白井晃さんがどんな演出を施すのか楽しみです。どうか皆様、日本発のオリジナルミュージカルの誕生を、愛情を持って温かく見守っていただければと思います。

### 渡邊尚（『妖怪ケマメ』出演）

ジャグリングは、現代サーカスで今最も熱い分野の1つとして注目されています。今回の作品はヨーロッパのサーカス界でとても有名なカンパニー「デフラクト」とのコラボレーションです。そもそもなぜジャグリングなのかと言うと、世界各国のどんな文化にもジャグリングっぽいものがあり、とても普遍性のある文化だからなんです。例えば日本だと、けん玉やお手玉、蹴鞠といったものがあります。誰もが楽しめるジャグリングですが、今回のコラボでは「新しいジャグリング文化を創り出そう」と試みていて、この作品のためだけのテクニック、道具、コミュニケーションを創り出しています。大人も子供も、どんな文化の人も楽しめるノンバーバルの作品にぜひご期待下さい。

### **ケラリーノ・サンドロヴィッチ（「ドクター・ホフマンのサナトリウム～カフカ第4の長編～（仮）」：作・演出）**

白井さんとは、KAATの芸術監督に就任される前から、共同作業をしかけては立ち消えるといった間柄で今回ようやく実現しました(笑)。僕はこれまでツイッターで自分のアイデアをフォロワーに問いかけ、観たいと反応してくれた作品をいくつも作ってきました。今回その手法で反応が良かったので提案した新作です。

カフカは存命中「失踪者」「審判」「城」という長編を書いています。いずれも完全なものはありません。彼は自分が結核で亡くなる前に、遺稿は全て焼き捨ててくれと友人に頼んでいたのですが、死後見事に裏切られて出版されており、おかげで現在の彼の知名度があります。そこで、さらなる長編4作目の遺稿が見つかったという設定にして、それを舞台化するというややこしい作品にしようというアイデアです。実際には4作目なんてありませんよ(笑)。でも、演劇でのフェイクドキュメンタリーとかモキュメンタリーといった作品と言えるかもしれません。

KAATはとても自由度が高い劇場で、演出家としては願ってもない場だとは思いますが。とはいえ、初めて創作する劇場ですので、ドキドキしています。僕としては今回あまり間口の広い演劇をやるつもりはありませんが、僕がやると大抵間口が広がるので、難しいものだと思うし楽しみにもしてもらえたら嬉しいです。

### **杉原邦生（『グリークス』：演出）**

この作品は、自分のカンパニーを立ち上げたときから挑戦したかった企画です。18,9歳の頃にNHKで放送された蜷川幸雄さん演出の『グリークス』を見て、これほど長いのに映像でも見続けられる演劇があるのか、と衝撃を受けました。今回は念願叶っての上演です。これまでに『エンジェルズ・イン・アメリカ』が8時間半、『東海道四谷怪談』が6時間と、上演時間が長い作品をいくつか演出してきました。本作はギリシャ悲劇10本を繋げた作品。おそらく僕の演出作品の中で最も長い作品になると思いますので、どうか“カフェインドリンク”などを用意していただきながらご覧いただきたいと思っています(笑)。KAATとは3回目の共同作業です。若いアーティストと公共劇場との共同作業は今後も増えていくと思いますが、まだ課題もあります。僕達がそのことに向き合い、後の世代のアーティストたちがものづくりしやすい環境を、劇場と一緒につくっていかれたらと思います。

### **長塚圭史（「常陸坊海尊」：演出）**

この作品は、KAATからのご提案でした。とんでもないものに手を出すことになるぞ(笑)と思ったのですが、読んで忽ち作品に惹かれてしまって今回上演することになりました。本作は秋元松代さんが書かれた一見とても奇妙だけれどもすごい作品です。義経の忠臣でありながら「衣川の合戦」で、自分の命を守るために戦から逃げた常陸坊海尊を軸に描かれていて、海尊は悔恨の想いを持ち続けたまま何百年も生きているという伝承が今も続いているというもので、物語は太平洋戦争の末期から始まります。そして日本に古来からある仙人の伝説やミイラ行など、伝奇・伝承・言い伝えなどをふんだんに取り入れ、人間の命が知らず知らずにつながっていくという魂が詰まった現代劇です。大作ですが、上演機会も非常に少ないですし、作品創りを任されて光栄に思っています。ぜひ期待してください。

### **山田うん（振付・演出『NIPPON・CHA! CHA! CHA!』）**

私はバブル景気を一身にうけた世代で、30年前の日本の高度成長期を舞台にした如月小春さんの戯曲に大変共感し、そのころの様々な思いが蘇ってきて、これをダンスで上演したいという思いと、オリジナルの演劇作品としても上演したいという思いがあり、2パターンで上演することにしました。自分が身を持って感じたバブルの希望や絶望が、日本の社会や土着とどのようにつながっているのかを身体で表現した『NIPPON・CHA! CHA! CHA!』と30年前に如月さんが書かれた『NIPPON・CHA! CHA! CHA!』を並べて上演することで、日本人としてオリンピックが始まる年に何を未来に見るのか、過去に見るのかを、同時にお客様と味わえたらと思っています。